



JAPAN PRIZE

2009年(第25回)日本国際賞 米国の2博士が受賞 天皇皇后両陛下をお迎えして授賞式



(財)国際科学技術財団が、世界の科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の平和と繁栄に著しく貢献した人を顕彰する2009年(第25回)日本国際賞の授賞式が、4月23日(木)東京の国立劇場で行われました。

今回の授賞対象分野は「自然と共生する持続可能な技術社会形成」と「医学・工学の融合における疾患への技術の展開」の2分野で、それぞれ163件、308件、合計471件の推薦を受け、この中から米国人2氏が受賞者に選ばれました。

「自然と共生する持続可能な技術社会形成」分野では『成長の限界』報告を基盤とする持続可能な社会形成への貢献をしたデニス・メドウズ博士が、また「医学・工学の融合における疾患への技術の展開」分野では核医学における断層イメージングに対する貢献を果たしたデビット・クール博士が受賞しました。

日本国際賞

「日本国際賞」は、全世界の科学技術者を対象とし、独創的で飛躍的な成果を挙げ、科学技術の進歩に大きく寄与し、もって人類の平和と繁栄に著しく貢献したと認められた人に与えられるものです。

受賞者は、国籍、職業、人種、性別等は問いませんが、生存者に限られます。

この賞の対象は、科学技術の全分野にわたりますが、科学技術の動向等を勘案して、毎年2つの分野を授賞対象分野として指定します。

本賞は、原則として各分野1件、1人に対して授与され、受賞者には、日本国際賞の賞状、賞牌及び賞金5,000万円(1分野に対し)が贈られます。

授賞業績

『成長の限界』報告を基盤とする持続可能な社会形成への貢献



デニス・メドウズ博士

1942年6月7日生まれ
ニューハンプシャー大学システム政策学 名誉教授
インタラクティブラーニング研究所 代表

受賞者挨拶

私を教育し、私の研究を支えてくださった数十人の恩師、数百人の学生たち、数千人の同僚たちに対して、ここで一人一人に感謝の意を表する時間は、残念ながら与えられていません。ただ、私が言えることは、彼ら一人一人と働いたことは私にとって荣誉なことであると共に、彼らから多くを学んだということです。

私は自然科学の分野でキャリアを築き始めました。化学を専攻し、政府の大きな研究所で働いていました。その後、私は経営科学に転向しました。それから40年、自然科学と経営科学にまたがる学際的な問題に取り組んできました。人類の文化的規範、政治制度、技術力、経営管理手法をいかに限りある地球と調和させることができるのかということを理解する試みは、私にとって非常にやりがいのあるライフワークになっています。

私は自然科学者を羨ましく思うことがあります。それは、彼らが自分たちのペースで自然について新しいことを学ぶことができるからです。彼らは時代よりもはるか先に進んだ研究をしていたとしても、社会がいずれ彼らの発見を理解し、彼らの仕事から利益を得ることができることを知っています。私の分野では、根本的に事情が異なっています。私は時代を超えて先に進むことはできません。理論上だけでは持続可能な開発のための科学は意味をなさないのです。私が学んできたことや、私が行ってきたことも広く社会によって受け入れられ、使われなければ何の価値もないのです。

人類の生存について理論上のモデルを開発できたとしても、それは私に何の満足も与えません。持続可能な開発には、人々の新たな理解と行動の変化が必要です。そのために私の活動の多くを情報発信と教育に捧げてきたのです。そうすることによって人々が様々な原因と、それによってもたらされる限界を理解し現在の行動を変えていくことのお手伝いをしたいのです。

この賞はその意味で大変貴重です。今後さらに20年、私がこの仕事を継続するための勇気と必要な財源を与えてくれるものです。この賞を与えてくださった皆様に深く感謝いたします。

授賞業績

核医学における断層イメージングに対する貢献



デビット・クール博士

1929年10月27日生まれ
ミシガン大学医学部 放射線医学教授

受賞者挨拶

今日ここに日本国際賞を受賞し、これまでにこの賞を受けられた著名な方々と私の名を連ねることができることを大変光栄に思います。

国際科学技術財団、また特に伊藤会長、吉川理事長、審査委員会の方々に感謝いたします。核医学分野の放出断層撮影の発展における私の役割を認めていただいたことに感謝の意を表します。

今日、放射性トレーサーを使った横断断層撮影は、エビデンスに基づく医療、臨床研究、創薬などの分野で独自の探索子として用いられています。放出断層撮影は、世界中の人々の健康を守るために役立ってきました。これは、多くの国々の有能な科学者の努力の成果です。また、医学、化学、工学の融合の結果でもあります。この種の分子イメージングの未来は明るいとと言えるでしょう。

国際科学技術財団が私の貢献を認めてくださったことに感謝し、また、核医学における放出断層撮影の可能性を認め、この分野が社会へ大いに貢献する技術であることを示してくださったことに感謝いたします。

授賞式



授賞式は天皇皇后両陛下をお迎えし、政・官界、在日外国大使、財界、著名な学者・研究者、言論界代表等約 850 名が出席して行われました。

財団の吉川理事長による主催者挨拶の後、熊谷審査委員長による審査結果報告および受賞者の紹介が行われ、「自然と共生する持続可能な技術社会形成」分野は茅部会長、また「医学・工学の融合における疾患への技術の展開」分野は金澤部会長から贈賞理由の説明がなされました。その後、日本国際賞の賞状、賞牌および副賞 5,000 万円がそれぞれ贈られました。受賞者の挨拶の後、三権の長を代表して河野衆議院議長が祝辞を述べられました。最後に受賞者の皆さんは天皇皇后両陛下とともに客席で東京藝術大学音楽学部学生オーケストラによる記念演奏をお楽しみになられ授賞式は閉会となりました。



記念演奏に臨まれる天皇皇后両陛下



式典の様子



記念演奏



河野衆議院議長 祝辞



吉川理事長 主催者挨拶



熊谷審査委員長 審査結果報告



茅部会長 贈賞理由説明



金澤部会長 贈賞理由説明

祝 宴



授賞式の夜、東京・帝国ホテル「孔雀の間」において天皇皇后両陛下ご臨席のもと、政・官界、在日外国大使および各界から約 270 名を招いて、盛大に祝宴が催されました。

冒頭、天皇陛下から受賞者の栄誉をたたえ、乾杯のご発声を賜りました。

食事と歓談の後、三権の長を代表して江田参議院議長から受賞されたお二人に対する祝辞が述べられました。

最後に両受賞者から謝辞が述べられ終宴となりました。



天皇皇后両陛下御臨席



伊藤会長 開会の辞



江田参議院議長 祝辞



ご懇談される天皇陛下



メドゥズ博士 謝辞



クール博士 謝辞

日本国際賞週間

4.20【月】



財団主催歓迎レセプション



受賞者合同記者会見

4.21【火】



日本学士院表敬訪問



受賞記念講演会

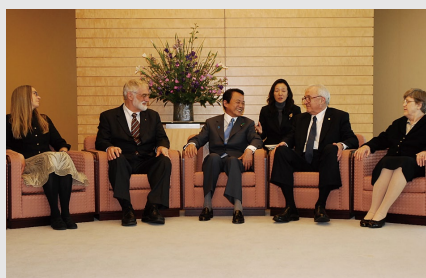
4.22【水】



財団事務所訪問



日本外国特派員協会昼食懇談会



内閣総理大臣表敬訪問



学術懇談会

4.25【土】



京都の休日



J A P A N P R I Z E W E E K P H O T O S



JAPAN PRIZE

2010年(第26回)日本国際賞

2010年(第26回)日本国際賞授賞対象分野は「工業生産・生産技術」および「生物生産・生命環境」の2分野です。

現在、世界各国の推薦人から受賞候補者の推薦書が多数寄せられています。財団に設置された日本国際賞審査委員会による厳正な審査を経て受賞者が決定され、受賞者の発表は2010年1月、授賞式は同年4月に予定されています。

領域Ⅰ(数学系、物理学系、化学系、工学系) 授賞対象分野:「工業生産・生産技術」

背景、選択理由

産業革命以来、科学技術の飛躍的な発展によって人々の生活水準は著しく向上し、人類史上未曾有の豊かな社会が実現しました。しかし、地球上には、この繁栄から取り残された人々がまだ数多くいます。一方で、科学技術を進めるにも、地球環境への配慮が欠かせなくなってきました。そのような視点を踏まえて、人類の真の繁栄のために、なお一層の生産技術の革新が必要とされています。

対象とする業績

2010年の日本国際賞は、工業生産・生産技術の分野において、飛躍的な科学技術の進展をもたらし、新しい製品や産業の創造、生産性の向上などを通じて、生活の利便性や安全性の向上、貧困の克服に寄与するなど、社会に大きく貢献する業績を対象とします。

領域Ⅱ(生物学系、農学系、医学系) 授賞対象分野:「生物生産・生命環境」

背景、選択理由

人類の生存は、過去もそして将来も、地球上の生物資源をさまざまな形で利用することなしにありえません。しかし、その生物資源を育む地球の環境は急速に劣化しつつあります。一方、技術革新によって食糧生産は飛躍的に増大しましたが、人口はそれをも超えて爆発的に増えようとしています。環境を守り、生物の多様性を確保するとともに、持続可能な環境保全型の生産が必要とされています。

対象とする業績

2010年の日本国際賞は、生物生産・生命環境の分野において、飛躍的な科学技術の進展をもたらし、食糧生産の飛躍的増加や生産性向上などを通じて生活の向上や貧困の克服に寄与したり、あるいは、生物多様性の維持や快適な生命環境の実現に寄与するなど、社会に大きく貢献する業績を対象とします。

国際科学技術財団とは

1982年に設立された財団法人 国際科学技術財団は、日本国際賞による顕彰事業のほかに、一般の方々を対象とした「やさしい科学技術セミナー」の開催や若手科学者の育成のための研究助成など科学と技術の更なる発展に貢献するための活動を行っています。

※ やさしい科学技術セミナー

私たちの生活に関わりのある、様々な分野の科学や技術について、その分野の専門家にやさしく解説していただきます。講演ばかりでなく実験室の見学なども行われ、学生から一般の方を対象に年10回各地で開催しています。

※ 研究助成

日本国際賞の授賞対象と同じ分野で研究する35歳未満の若手科学者を対象に、独創的で発展性のある研究に対し、助成を行っています。将来を囑望される若手科学者の研究活動を支援・奨励することにより、科学と技術の更なる進歩とともに、それによって人類の平和と繁栄がもたらされることを期待します。

※ ストックホルム国際青年科学セミナー

ノーベル財団の協力でスウェーデン青年科学者連盟が毎年ノーベル賞週間にストックホルムにおいて開催する「ストックホルム国際青年科学セミナー(SIYSS)」に1987年以降、毎年2名の学生を派遣し、世界各国から派遣された若手科学者との国際交流の機会を提供しています。